

## もうひとつの食と農の道

もはや重厚長大の時代でもあるまい、といわれながらもこの国では相も変わらず、大きいを良しとする考え方から抜け出せないように見える。それは巨大ショッピングモールが次々に地方の商店街をつぶしていく風景に似て、小さな営みに心を配る余裕を失った私たち自身と社会の姿をあらわしているように感じる。

農政もまた農地の大規模化への道をひた走るだけのように見える。戦後農政の大転換の名のもとに進められてきた「品目横断的経営安定対策」とは、農地の大小をモノサシにした農の担い手の選別であり、私などにはとても政策などと呼べる内容のものではないと思える。すでに日本農政は1990年、30a以下の農地しか持たない小農は「自給的農家」であるとして政策の対象から外した。いわば農家の第一次リストラだった。こんどの第二次リストラ策は、4 ha以上の農地をもつ認定農業者か、20ha以上農地をまとめた集落営農組織以外は政策支援しないという。

周知のとおり日本の農家の57.4%は1 ha以下の農地を耕し、3 ha以下が90%を占めている。いわば小農の営みが日本農業と食料を支えているのである。それらを切り捨てて、食料自給率向上はもとより、どんな食と農の未来が展望できるのか。

私はこの1年半、東北の農村に足を運び、新政策によってゆさぶられて思い悩み、不安と迷いの中で苦悩する人々の姿をみてきた。そのたびに30年も前に書かれた一人の農学者の一文を思い出していた。

「耕している田んぼが小さいからといってなにも人間までが小さくなることはあるまいと思うのだが。田んぼが大きいとか、がんばって大きくしたとかでそれを自慢するのは、それはそれで気持ちもわかることである。そういう農家は家も大きいことでもあろう。それが嬉しいとすればそれもよくわかることである。だが、大きいのは家や田んぼだけのことなのだということを最近つくづく感じさせられるのである。おせっかいの多い世の中だが、輪をかけたおせっかいがいるものだ。規模を拡大しろというのである。ほとんどみんながそうな

のである。あんまり皆が農家をつかまえてそういうものだから、田んぼの面積が小さいとか、それを大きくしないとかの農家は、何となく反社会的な存在のように思い込まれるようにさえなっている」(守田志郎『農業は農業である』より)

この文章が書かれた1970年代初め、日本にはまだ1,025万人の農民が汗を流していた。食料自給率も60%近くあった。それが大規模農業推進の中で農民は3分の1以下の324万人に減り、食料自給率は40%を割ろうとしている。私たちは大規模農業一辺倒の農政から、どんな希望を手にしたのだろうか。耕す人々はすべて農民である。種をまき食を得る土地は大小を問わず大切な農地である。その上に立って汗する人々を支援していくのが政策というものではないのか。自分ではやらない人間が小手先で立案した計画は、たとえ理屈はたっても所詮は机上のプランである。農業の担い手を選別する前に「農政の担い手」こそ選別されるべきではないのか。

しかし政策対象外になったからといって、いたずらに悲観することはない。日本農民はたくましい。政策対象とは一方で政策に呪縛される存在でもある。考えれば政策対象外とは呪縛からの解放でもある。1990年に自給的農家として切り捨てられた80万戸の小農たちは、むしろ呪縛から解かれて自由になって、田畑近くに農産物直売所を次々に開設し、女性と高齢者を中心に生き生きと活動をはじめた。大規模単一栽培ではなく小規模多品種栽培への転換で忘れていた農の喜びを取り戻していった。曲がったキュウリ、不揃いの野菜は安全のしるし。食に不安と不満をかこつ都市の消費者が次々に畑近くの直売所にかけつけてきた。改めて知る朝採り完熟野菜のおいしさ、新鮮さ。そしてこの不況下の10数年で全国に1万か所の農産物直売所が開設され、その売上げは5千億円をこすといわれている。この意欲と笑顔のあふれる直売所は、政策によって生まれたものではなく、解放されて自由で伸びやかになった小さな農家によって達成されたことを改めて確認しておきたい。国の施策だけが農業振興の唯一の道ではない。作り手と食べ手がつながる、もうひとつの食と農の道を切りひらいていきたい。

(民俗研究家 結城登美雄・ゆうきとみお)